

本棚見様



山形浩生

評論家・翻訳家

「基本的には何でも読みますよ。書評の仕事をしているから」ということもあります、本は暇つぶしに読むものですから（笑い）。もつとも、国産系の小説は村上龍とか石川淳や中原昌也以外はあまり読みません。単に食わず嫌いなのかもしれません、世界が狭い気がして……国産系はマンガのほうが優秀です」

そう語るのはウイリアム・バロウズやボトル・クルーグマンの翻訳で知られる評論家の山形浩生さん。

「本が散乱しているから」と渋る山形さんは洋館のような洒脱なマンションだ。重い扉を開けると、全身にくまなく釘を打ち込まれたアフリカ製の人形が出迎えてくれた。

玄関から続く廊下の壁一面が巨大な

本棚。そこにバロウズ、トマス・ピンチヨン、アゴタ・クリストフほか北米、南米、ヨーロッパ等の外国文学から経済学や進化生物学、物理学などの専門書に、各種全集、写真集まで、多岐にわたる書物がところ狭しと突っ込まれていた。本棚に入りきらない分は、床に散乱している。「小説の場合、ストーリーのパターンはだいたい決まっています。恋愛して悩むとか悩まないとか。それをどう新しく見せるかが書き手の腕ですが、そこに科学や奇想を持ち込んだり、言葉で遊んだりしたのが20世紀の南北アメリカ文学。だからおもしろかった」

個人的には経済学や進化生物学などノンフィクションを好んで読む。現実世界のほうが、人間が考えつきもしないようなことがたくさん起っているからだ。

思いついたことと、裏づけが取れていることでは、迫力が違います」

最近、近くの古本屋で子どものころに衝撃を受けた本と再会した。『世界怪奇スリラー全集4』。世界の謎と恐怖を描

中国めやげの置物。躊躇つけられている人物の首には、「打倒走漬派」というがかけられている



取材・文=品川裕香
写真=品川裕香

いた本で怖いけど読みたい」と、山形少年を苦しめた。

「あの本がなぜここに」と感激しました。こういうふうに「意外なところで意外な本」に出会ううれしい。あるいは、関係ないつもりで読んだ本が別の興味のある分野につながったり。こういう驚きが本を読む楽しみでもあるんです」

やまとた・ひろお 1964年、東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学科修士課程修了。マサチューセッツ工科大学大学院修士課程修了。現在、大手シンクタンク勤務。訳書に「クルーグマン教授の「ニッポン」経済入門」(春秋社)など。最新の共訳書は「ダメなものは、ダメになる」(ステイブン・ジョンソン著、羽承洋訳)。

意外なところで
意外な本に出会う
そんな驚きが
読む楽しさです

